

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

秋
2022
創刊号

青いスピズ

寺地はるな

中田永一

朝比奈あすか

伊藤ハムスター

森川智之

稲垣栄洋



青いスピンの 目次

- 1 創作「コラルド・フェルナンデスと二人の娘」 寺地はるな
- 9 創作「机のガタガタ」 中田永一
- 16 創作「イチゴ」 朝比奈あすか
- 23 科学エッセー「本当は人間の脳も知っていること」 稲垣栄洋
- 26 エッセー「国語と声優」 森川智之
- 28 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 30 コラム「目で読むSDGs図鑑——持続可能ってなに？」
- 32 コラム「世界の友だちの一日」

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそつとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、

その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、

物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、

あなただけの新しい世界を見つけてください。

コラルド・フェルナンデスと 二人の娘

寺地はるな 絵・原倫子

「コーポむらい」の二階のつきあたりの3LDKに、ミリとミリの両親はもう十四年近く住んでいる。ミリが生まれた年に引越してきたというから、そういう計算になる。妹のサラは四歳だから、ここに住んで四年だ。コラルド・フェルナンデスの居住歴が何年であるかは、よく覚えていない。

「悪いけど、お願いね。」

玄関の鏡に向かってあわただしく髪を整えながら言う母に、ミリは返事をしなかった。返事をしないことで、遺憾の意を表明したつもりだった。日曜日の朝から留守番を頼まれた。友達との約束があったにもかかわらずだ。今日はミリの誕生日で、サラは熱を出してねこんでいる。遺憾でないほうがどうかしている。

友達三人が誕生日を祝ってくれるはずだった。みんながお金を出し合って買ってくれたケーキを食べ、プレゼントをもらう予定だった。ミリが彼女たちの誕生日にそうしてきたように。行けなくなったと連絡したとき、みんなはなぐさめてくれた。しかたないよ。大丈夫、来週の日曜日に延期しようよ。そう言ってくれはしたが、来週の日曜日はミリの誕生日ではない。

父は病院に勤めていて、日曜日に休めることはめったにない。母は働いている会社は基本的に土日休みであるのだが、しょっちゅう「急な仕事」というものが発生し、呼び出されて出かけていく。

「ねえ、お母さんのイヤリング見なかった？ 片方ないの。」

母は玄関で靴をはいている。ミリはキッチンに移動しながら「知らない。」と声を張り上げた。

「オパールの、楕円形のやつなんだけど。」

「知らないってば。」

うんざりしながら、朝食のシリアルを皿にぶちまける。「いつてきます。」に続いた「ごめんね。」は、聞こえなかったふりをした。皿を持って居間に移動すると、ソファーに放り出されたコラルド・フェルナンデスが丸い目でミリを見上げていた。

コラルド・フェルナンデスはパペットだ。手を入れて、口をばくばくと開閉させられるようになってる。スナップボタンで取り外しできる黒い帽子に丈の短いはでなジャケットという、闘牛士風の衣装を身に着けている。ジャケットにはビーズやスパンコールや鏡を丸く小さく切りぬいたものがみっちり縫いこんである。口ひげをたくわえているので、コラルド・フェルナンデスはおじさん人形と呼ばれるときもある。買ったものなのか、もらったものなのか、なぜコラルド・フェルナンデスという名なのか、それが元から付いていた名なのか、はたまた両親のどちらかが付けた名なのか、ミリは知らない。ミリが知らないのだから、サラも知らないだろう。

幼児であることを差し引いても、ミリの目には、サラがあまりものを知らない、かしこくない子に見える。サラはテレビの中の人にもこちらの声が聞こえると思いきいんでおり、熱心に話しかける。そうかと思えば突然「お姉ちゃん、ジュースにお水を入れたら、いっぱい飲めるんじゃない？」と言いだしたりもする。味がうすくなるだけだからやめときなよというミリの制止をよそにサラはりんごジュースのコップを片手にキッチンに突進し、何をどうしたものかそこら一帯を水浸しにして、なぜかミリが母にしかられた。

サラには自己主張が強すぎる一面もある。ミリが父や母と話しているとき、必ずと言っていいほど

割りこんでくる。サラが生まれる前の話でもおかまいなしに「知ってる、それはね。」などと言いだすのだ。

この家では「痛い痛い飛んでいけ。」というおまじないが使われない。誰かがけがをしたときや腹痛を起こしたときは、父も母も「痛い痛い、ぱくぱくぱく。」と言いながら、コラルド・フェルナンデスの口を動かす。誰かが失敗して落ちこんでいるときや苛立っているときなどもそう。悪いものは全部、コラルド・フェルナンデスが食べてくれる。

ミリは、サラに会話に割りこまれるたびに苛立つ。でもその気持ちはうまくかくしているつもりだ。いちおう姉ですので、という思いがミリにはある。でも両親は気づいているらしい。ミリの苛立ちを察知するたびにパペットを持ち出す彼らは、でも、そんな茶番がもうとつくにミリに通じなくなっていることにはいまだに気づいていない。

朝食をものの五分で食べ終え、ミリはサラの部屋に向かう。水色のカーテンが数センチ開いていて、そこから差しこむ日光が床に散乱するぬいぐるみやクレヨンをつくきりと照らし出していた。踏まなようにつま先立ちでベッドに近づき、のぞきこむ。サラは枕を片頬に押し付けるようにして眠っていた。いちばん熱が高かったときには赤い顔をしながらも元気に遊んでいたのに、少し熱が下がった。昨夜からはずつと眠り続けている。じつと見ていたら、ぱっちりと目を開けた。「ご飯食べてお薬飲むか。」と声をかけると、首を横にふる。

「おかゆ、いや。」

そこから、怒涛の「いや」が始まった。パンもいや、スープもいや、ミリちゃんいや、ママがいい。

「そんなこと言わないの。」

きつい口調で言ったつもりはなかったのに、サラはびくつと体を震わせ、それから声を上げて泣きだした。ミリはその様子をながめながら、途方に暮れる。

サラはずるい。

部屋を散らかしても、台所を水浸しにしても、いやいや言っても、全然おこられない。

ミリは再びつま先立ちで居間に取って返し、ソファーに転がっていたコラルド・フェルナンデスを連れてきて、サラのいやいやを食べつくした。茶番だと知りながらも、ミリはほかに妹を落ち着かせる方法を知らない。

「ほうら、サラちゃんの悲しい気持ちを、全部食べちゃうぞ。ぱくぱく。」

言いながら、ばかみたいだと思った。こんな芝居がかかった作り声を出したりして。もし誰かに聞かれたらはずかしくて三日は部屋から出られない。

それから何とかサラにりんごジュースを飲ませ、ミルクプリンにしのばせた薬を服用させた。歯みがきをさせてベッドに連れ戻すころにはミリはもう疲労困憊の状態で、サラの隣にごろりと横になる。

ああ、いやだ。「姉」なんて何にもいいことがない。コラルド・フェルナンデスは腹が立たないのだろうか。他人の肉体的な痛みやネガティブな感情ばかり食べさせられて、いいかげんうんざりしているのではないだろうか。ミリならとつくに逃げ出しているところだ。

でも、コラルド・フェルナンデスは逃げられない。だって人形は自力で動けないから。ミリがこの家の長女という立場から降りられないように、コラルド・フェルナンデスは人形であることから降り

られない。

「サラはずるいよ。」

言葉が勝手にこぼれ出た。ぱちぱちとまばたきをしたサラは「ミリちゃんのほうがずるい。」とつぶやく。変なことを言う子だ。そんなわけがあるか。

「なんで。」

サラは答えない。なんで、なんで、ねえなんでなんで、としつこく質問を重ねて、ようやく「だつて」という言葉を引き出した。

「だって、パパとママとミリちゃんはサラの知らない話ばかりして、ずるい。」

どうしてもすぐに返事をする事ができずに、しばらく黙っていた。

ミリには両親との三人きりの時間が、十年分ある。先に生まれた。ただそれだけのことが、もしかしたら妹の目にはとてもなく良いものに見えるのかもしれない。

サラはやっぱりあんまりかしくくないんだな、と思った。サラだけじゃなくてたぶん私も、とも。

かけぶとんの上に転がっていたコラルド・フェルナンデスを持ち上げると、いつのまにかスナップボタンが外れた帽子から、何かが転げ落ちた。

母が探していた、オパールのイヤリングだった。

「サラがここにかくしたの？」

「サラ、知らないもん。」

とぼける妹の頬をつんと突く。やわらかくて、少し冷たかった。もう熱はすっかり下がったようだ。

出産のため入院していた母が無事退院し、サラを連れて帰ってきた日のことを、ミリはよく覚えている。頭も手も何もかも全部小さくて、でも何もかもが、完璧にそろっていた。かわいいサラ。私の妹。サラが生まれた日のことを、ミリは覚えている。でもサラはミリが生まれた日のことを知り得ない。

オパールは不思議な色の石だ。乳白色のもやに包まれたその奥に、さまざまな色をかくし持つ。ミリが手をかたむけると、オレンジ色がかっていた部分が黄から緑に変化し、カーテンのすき間からもれる光に当てると、青みがかって見えた。早朝や真昼や夕暮れや、そんないくつもの空を少しずつ切り取って、雲でくるんで結晶にしたみたいだ。

「ねえ、見て。」

サラが天井を指差す。丸い光が、右から左にちらちらと動く。コラルド・フェルナンデスのジャケットに縫い付けられたかざりが、日光を反射している。サラはオパールではなく、そちらに夢中になっていたらしい。



つくえ 机のガタガタ

なか た えい いち
中田永一

絵・中村隆



「きれい。」

サラは手をのぼして、光をつかまえようとしている。小さいな、すごく小さい手だなと、毎日見ているのに、今初めて見たようにミリはおどろいた。

「つかまえた？」

「つかまえた！」

サラがぐつとにぎりこんだ手をコラルド・フェルナンデスの前でぱつと開いたから、ミリは急いで、彼の口を動かした。「わあ、うれしいな。」と言ってみる。芝居がかった作り声ではない、本物の自分自身の声が出た。

そのうちにサラはまた眠ってしまったけれども、ミリは居間にも自分の部屋にも戻らなかった。あおむけになったまま、サラのやわらかい髪に自分の頬をくっつけて、天井の小さな光をいつまでも見つめていた。

寺地はるな 作家。佐賀県出身。著書に「夜が暗いとはかぎらない」「水を縫う」などがある。

おれは勉強がきらいだ。特に算数。授業は退屈だし、ねむくてしかたない。そんなとき、机をガッタンゴットンとゆらして、ひまつぶしをする。

おれの机は、どこかのねじがゆるんでいるせいで、足の長さがふぞろいだ。そのため、がたついて安定しない。おくに体重をかければ、ガッタンとかたむく。手前にひじをつけば、ゴットンとかたむく。

ガッタンゴットン。
ガッタンゴットン。

そうしているうちに、算数の授業が終わる。休み時間に友達と教室を走り回った。「静かにしなさい！」と先生におこられる。聞こえないふりをすればいい。プロレスをやったり、プリントを丸めたものでキャッ

んだ。最近はその時間が近づくと、全員、地震に備えて身構えるようになった。だから被害は少ないみたいだけどね。」

ちなみに地震が起きるのは、月曜と火曜の午前中、そして木曜と金曜の午後だという。

水曜日と休日は、なぜかゆれないらしい。ふと、きみようなことに気づいた。世間で地震が起きるのは、おれのクラスで算数の授業が行われている時間帯にぴたりと一致しているのだ。水曜日はおれのきらいな算数の授業がないし、休日はそもそも学校に行つてない。おかしな偶然も、あるものだ。

おれが退屈で机をゆらしている時間に、日本のどこかで地面がゆれているなんて。

おれの席は窓際の後ろから二番目だ。その日、外はよく晴れていた。グラウンドで体育をしているほかの学年

チボールをしたりする。困った表情で先生が見ているけど、楽しければそれでいい。

「今日も地震があつたみたいね。」
「不思議なこともあるもんだな。毎週、決まった時間にゆれるなんて。」

夕飯の時間、ニュースを見ながら両親が話している。テレビには地震が起こったときの映像が映っていた。今年に入ってひんぱんに地震が発生しているという。

「専門家も頭をなやませている。こんなことは、ありえないって。」

「何でありえないの？」
「ご飯とみそ汁と肉じゃがをいっぺんにほおぼりながら、おれは父さんに質問する。」

「地震というのは、いつどんなタイミングで起きるのか、予測が難しいものなんだ。だけど今年に入ってから、毎週、同じ曜日の同じ時間に地震が発生してる。場所は定まってないけれど、この日本のどこかの地域がゆれる

の子どもたちをながめながらあくびをする。早く休憩時間にならないかな。そんな風にぼんやりと考えていた。「今日は水曜日ですが、特別に今から算数の勉強をしたいと思います。」

先生がそう言うと、みんなが「ええ！」と声を出す。さっそくプリントが配られた。分数や図形の計算問題。おれの苦手なやつだ。ああ、いやだ、いやだ。めんどろくさいな。まずは各自、計算をする。その後、答え合わせをしながら、先生が黒板を使って説明し始めた。退屈な時間だ。おれは無意識に机をゆらす。

ガッタンゴットン。
ガッタンゴットン。
ガッタンゴットン。

そのときだった。カタカタと、どこかで音がしたかと思うと、地面がゆれ始めたのである。世界が不安定な台の上に乗せられ、

前後左右にスライドしているかのようだ。

「地震だ！」とだれかがさげふ。

「みんな落ち着いて！」と先生が言った。

ありがたいことに、ゆれはすぐにおさまって、教室はいつも通りにもどる。

「水曜日なのに……。」

先生のつぶやきが聞こえた。

おれは自分の机を見る。まさかそんなわけないよな。

おれが算数の退屈さから机をゆらしたタイミングで、いつも地震が発生しているみたいだけど、偶然だよな。

今日は地震が起きるはずのない水曜日。

それなのに、机をゆらしたとたん、地面もゆれた。

いったい、どうなってるんだ？

おれは試しに、机を片手でゆらしてみる。

ガッタンゴットン。

ガッタンゴットン。

おくへ、手前へ。

机の天板がかたむきを変え、鉛筆が転がり落ちる。

ガッタンゴットン。

ガッタンゴットン。

すると、ゴゴゴゴゴゴ、と低い音がして校舎がずしんと震動した。

「きゃああ！」

クラスメートたちの悲鳴が上がる。

おどろいたおれは机にしがみついできかかえるようにしながらゆれを止めた。とたんに地面の震えはおさまり、ぴたりと周囲は静かになった。

テレビで専門家が今日の地震について話している。日本海側の活断層が原因だという。父さんと母さんが真剣な顔でニュースを視聴していた。

「今日の地震、大丈夫だった？」

母さんがおれに聞く。

「う、うん、まあね……。」

「水曜日なのにゆれるなんてめずらしいよ。身構えてなかったから、けがをした人もいるみたい。」

階段で転んで負傷した人がいたらしい。ニュースで報道されていたという。もしかしておれのせい？ 急に口数が少なくなったおれを、父さんと母さんが不思議そうに見ていた。

三

そうじの時間になると、まずは教室の机を全て後方に移動させる。教室前方が開けるから、ほうきや雑中でそうじして、それからまた机を元の位置にもどす。これが教室そうじの手順だ。

おれはそうじがきらいだから、いつもは友達とほうきをふり回して遊んでばかりいる。真面目にやっている女子にぶつかって迷惑をかけることもあった。

だけど今日のおれは遊ぶ気が起きない。自分の机を持ち上げ、できるだけゆらさないよう、そろそろと教室後方へ移動させる。自分の机のことが、気になって気になってしかたなかった。友達とはしゃいでいる場合じゃない。真面目な女子たちに交じっておれはそうじをした。机を元の位置にもどすときも、ほかの子にやらせるわけにはいかなかった。無造作に放り出すように机を置かれたら、ガッタンゴットンとゆれてしまうではないか。

おれの机のがたつきと、地震との間には、おそろく関係がある。どうしてなのかわからないけど連動している。おれは机を慎重にあつかうと決めた。もしもまた地震が発生してけが人が出たら、おれはだれに許しをこえばいい？ もう二度と、絶対に地震なんて起こさせちゃだめだ。おれが真面目にそうじしているのを見て、ほかの男子も遊ぶのをやめて手伝ってくれる。女子が意外そうな顔をしながらおれたちに感謝してくれた。

午後算数の授業があった。退屈でしかたなかったけれど、いつもみたいに机をゆらすようなまねはしない。

がたつかないように天井をおさえつけておれは分数の計算をする。先生がどこかうれしそうな表情をしていた。真剣な目のおれを見て、勉強を熱心に取り組んでいるものと誤解ごかいさせてしまったようだ。先生の期待を裏切うらぎつてはいけない。いつもより集中して算数の授業を受けることにする。

夕方のニュースで、今日は地震が発生していないことを知る。いつもなら日本のどこかで地面がゆれているはずの曜日だ。専門家は不思議がついていただけ、おれはその理由を知っている。

四

日本は地震の多い国だ。

大きな地震を体験して、心に傷きずを負った子どもたちがたくさんいる。そんな子は、小さな地震にそうぐうすると、悪い記憶きおくを思い出して、泣きたくなるようなつらい気持ちになるらしい。

かれらはしゅんとした顔でおとなしくなる。教室にいたほかの子たちが、なぜかおれに向かって拍手はくしゅしていたけど、何で拍手されているのかおれには分からない。

「最近、地震がないね。」

「あんなにゆれていたのに、どうしてなんだろう？」

夕飯の時間、父さんと母さんが不思議がついていた。大人たちは知らない。おれの机と地面が連動れんどうしていることを。

机とは、ノートを広げて勉強する場所だ。

地面とは、この国を乗せている場所だ。

その二つがつながっているのは、どうしてなんだろう。

何か深い意味があるのかもしれない。

「そういえば、背せがのびた？」

もしもおれが、机をガツタンゴットンとやってしまつたら、その子たちが悲しい思いをする。だからもう、おれは机をゆらすようなことはしないとちかう。

それなのに、ある日のことだ。教室で体の大きな男子がけんかを始めやがった。激げきしい取っ組み合いだ。そいつらの体が、おれの机に勢いきほいよくぶつかった。

ガツンと机がはじかれたようにバランスをくずす。かたむいて、ゆかにたおれこむさまが、おれにはスローで見えた。

「あつぶなあい！」

おれはスライディングですべりこんで体全体で机を受け止める。ガツン、と頭をゆかで打ってしまったけど、机は無事だ。おれの体がしよげきを吸収きゅうしゅうしたから、きつと地震は起きてない。失敗していたら、どうなっていたことか。

机を元にもどし、けんかしていた男子を仲裁ちゅうさいする。

「おまえたち、周りに迷惑めいわくだろ！」

おれはおこっていた。大地震だいじんが起きる寸前すんぜんだったんだ。

母さんがおれを見て言った。

三学期の最終日、先生から通信簿つうしんぼをもらう。帰りのホームルームが終わると、クラスメートたちが教室を出て行く。おれは六年生に進級しんきゅうするから、この机とも、お別れだ。

だれも見っていないすきに、机を教室からそつと運び出す。おれの小学校には使用しやうされていない教室がいくつかあって、ほこりのかぶつた机やいすが積たかまれていた。そこに持もつていき、地震を引き起おこさない普通の机ふつうのきと入れかえた。

これでもう、大丈夫。

しばらく地震は起きないだろう。

イチゴ



朝比奈あすか

絵・芳野

ピッ。三百九十八円。

スーパーのレジで働いている真由美は、その日、バーコードリーダーで読みこんだイチゴの値段を見て、春が来た、と思った。

旬のものの値下がりには、季節の移り変わりを告げる。後で買って帰ろうか。真由美の子供たちはイチゴが好きだ。夫の俊通は夜行バスの運転手で、今夜は帰らない。中学二年の息子・翔太と、小学三年の娘・結愛との、母子三人の夜。本音を言えば、三百九十八円というのも安くはないが、たまにはぜいたくもいだろう。父親がいない夜は、あの子たちもさびしいはずだ。

しかし仕事を終えた時間に、目当てのイチゴは売り切れていた。真由美は、肩を落とした。立ちっぱなしの仕事なので、足がじんじん痛む。

帰りの途中に、苦手な道がある。それほど広くないのに、大通りへの抜け道となっていて、スピードを出した車がびゅんびゅん通るのだ。申し訳程度に白線一本引か

れただけの歩道を自転車で走る。たまにランドセル姿の子がてくてく歩いているのを見かけるが、本当に危ない道だと思う。

アパートに着いて、ドアを開けると、玄関に翔太の靴があった。

「ただいま。翔太。帰ってんの？」

返事がない。

「返事がないから入るよ。」

真由美は、わざと能天気をよくおった声で言いながら、子供部屋のふすまを勢いよく開けた。

ベッドにうずくまっていた翔太が顔を上げた。その目は真っ赤だった。

「勝手に入んなよ！」

即座に体の向きを変え、翔太は耳にイヤホンを付けたまま、手にしたスマホをいじり続ける。丸めた背骨が思いがけず細い。

真由美は立ちつくす。

息子の背中に手をそえる自分を想像する。あるいはス

マホをもぎ取って、問いつめる自分を。

学校で何があったの？ 大丈夫？

答えは分かっている。大丈夫。ほっとして。

いつのまにか、子供の心の中が見えなくなった。

何と話しかけようかと思っていると、玄関から「ただいまあ。」と元気な声がした。結愛が、学童から帰ってきた。

「ねえ、お母さん、聞いている？」

結愛にシャツを引っ張られ、

「危ない！」

まな板で野菜を切っていた真由美は、つい険しい声を発した。

学童から帰宅した結愛は、真由美の隣でずっとしゃべり続けている。注意すると少しむくれるが、でもまたすぐ話しだす。友達のこと、先生のこと、休み時間の遊びについて。真由美は、火の通りがよくなるように、野菜も肉も細かく切る。

カレーの仕込みが終わると、真由美は、

り口をだいじに結ぶ。

自転車のペダルをこぐと、夜風が頬にふきつけた。前かごに入れたイチゴのナイロン袋が風を受けてシャラシャラと音を立てる。夜目に車のライトがまぶしい。やっぱり危ない道だ。多くの車は真由美の自転車を追い越すときに速度をゆるめてくれるが、たまに思いやりのない車が横をシューツと飛ばしていく。ダンプカーにそれをやられて、ひやりとした。

——何かが起こってからじゃ、遅いのね。

ふと、スーパーで働く人たちがこの道について話していたのを思い出す。ガードレールを付けてくれればいいのね。誰かが言った。そうよ、そうよ、と皆が言った。どうしてなんだろう。

真由美は思う。あれを聞いたのは一年以上前のことだ。どうしていまだにガードレールは付いていないのだろう。

「カレーだよ。」

真由美が陽気な声を出すと、腹をすかせた子供たちは

「今からちょっと買い物に行くから、留守番お願いね。」と、結愛に言った。

「私も行く！」

「自転車でちゃっちゃと行っちゃやうから、結愛は家について。ユーチューブ見てていいから。」

そう言うと、結愛はだまる。

「七時からご飯ね。」

真由美は、翔太にも聞こえるように大きな声で言うと、施錠し、アパートの外階段を急いで降りた。そして、さっきまで働いていたスーパーへ自転車を走らせた。

夕食前の店内は混んでいた。

買い物かごを手にするのもどかしく、真由美は足早に果物のコーナーを目指す。

あった。ほっとして、残っていたイチゴのパックをそっと手に取った。安いイチゴは早い時間に売り切れてしまったが、高級ブランドのイチゴはまだ残っていた。その値段に一瞬ひるむが、買ったかった。イチゴをナイロン袋に入れて、空気をふきこんで丸くふくらまし、入

すぐやってきた。

「やったあ！ カレーだ！ おいしい！」

結愛がはしゃぐ横で、翔太はもくもくと食べている。

翔太の食欲があることに、真由美はひそかにほっとしている。自転車を走らせた足は、かたく張っていて、正直立っているだけでくたくただったが、立ち上がり、子供二人に水のおかわりをくむ。

「翔太、どう？ カレーの味は。」

結愛のおしゃべりをさえぎり、真由美は、ずっとだまっている翔太に問いかけた。翔太はどこか焦点の定まらない、暗い目をしていた。「どう？」ともう一度きくと、はつと顔を上げ、「何が？」と言う。

「お兄ちゃん、ぼんやりしすぎ！」

結愛が笑う。

「うるせえな。」

言い返すその声にも、いつもの張りはない。

食事を終えた後、真由美は結愛に「向こうの部屋に行っ

「翔太。言ってくれなきゃ、何も分からないよ。」
「だから、何でもないって言ってるし……。」
と言って、そのまま出て行こうとした翔太に、

「お母さん、帰り道、こわかったんだよ！」
と、真由美は言った。

「お兄ちゃんに、だいたい話があるの。」

部屋にいたがる結愛に「ユーチューブ見てていいから。」
とタブレットをわたした。ようやく翔太と二人きりで向
き合う。

「あのさ、学校で嫌なことがあるんじゃない？」

真由美は率直にたずねた。

「え、なんで？」

翔太がきく。

「顔を見れば分かるよ。」

翔太は無視し、スマホをいじりだす。

「いつもスマホばかり見てるけど、そんなに何を見て
るの。」

そうきくと、警戒する顔になりスマホを置いた。

「何でもないよ。」

い。どうしてだと思おう？」

翔太は少しだまってから、「予算がないんじゃない？」

と言う。予算……予算ね。そんな難しいこと言うのかと
思いながら、

「お母さん、明日仕事に行く前に、役所に電話してみよ
うと思う。」

と、真由美は言った。

さっき思いついたばかりのことだった。どうしてずつ
と思いつかなかったのだろうかとも思った。

「やめときなよ。そんなの、意味ないよ。」

「意味ないかどうかなんて、分からないよ。こういうこ
とは、自分だけで悩んでいても、何も始まらない。頼れ
るところに、ちゃんと頼らないと、変わらないんだよ。」

すると、翔太がスマホをいじりだす。

「ちょっと。聞いているの？」

「……それなら、こういうほうが。」

と言って、翔太は何やらスマホの画面を真由美に見せ
た。役所のホームページ内にある、「請願・陳情の書き方」

「翔太。言ってくれなきゃ、何も分からないよ。」

「だから、何でもないって言ってるし……。」

と言って、そのまま出て行こうとした翔太に、

「お母さん、帰り道、こわかったんだよ！」

と、真由美は言った。

「お兄ちゃんに、だいたい話があるの。」
部屋にいたがる結愛に「ユーチューブ見てていいから。」
とタブレットをわたした。ようやく翔太と二人きりで向
き合う。

「あのさ、学校で嫌なことがあるんじゃない？」

真由美は率直にたずねた。

「え、なんで？」

翔太がきく。

「顔を見れば分かるよ。」

翔太は無視し、スマホをいじりだす。

「いつもスマホばかり見てるけど、そんなに何を見て
るの。」

そうきくと、警戒する顔になりスマホを置いた。

「何でもないよ。」

い。どうしてだと思おう？」

「何、何。」

「えらい人に頼む、正式な頼み方じゃない？ ここにく
わしく書いてある。個人より、団体で出したほうが効果
あると思うよ。」

「へえ……。」真由美は感心した。「そうか。じゃあスー
パーの仲間たちにも声をかけてみるか。ありがとう、翔
太。」

真由美の言葉に、翔太は照れくさそうな顔をする。で
もその表情はまたすぐ暗くなる。無言で部屋を出て行こ
うとする。

「待って、翔太。」

真由美はあわてて引き止めた。

「あのさ、本当に言いたかったのは……。」

あんたが心配で心配でたまらないんだよ。

「子供の悩みを知らないことが、大人はともつらいっ
てこと。」

真由美が言うと、翔太はうつむいた。

「きついこと、ずっと一人で抱えてるんじゃない？」

息子は何も答えない。

「でもさ、いつまで抱えてく？ きついことがあったときに、誰かに頼ることって、だいたいな方法だと思うよ。弱さじゃないよ。お母さんじゃ頼りにならないって思っているのかもしれないけど、だったら学校の先生とかほかの大人とか、話せそうな人はいない？ 大人に頼らないと解決しない問題もあると思うよ。」

途中でさえぎられるかと思っただが、息子は静かに最後まで聞いていた。

「お母さんも、いつでも話、聞くよ。」

小さくうなずいた息子を見て、真由美は何だか泣きたいような気分になった。

「はい、終わり。さて今日はイチゴがあるんだ！」

明るい声で言いながら、冷蔵庫を開ける。自ら発光しているかのように、イチゴがまぶしく輝いた。

「結愛もおいで。イチゴだよ！」

真由美はふすまを開けた。

結愛はタブレットを見ていなかった。和室の奥で一人うずくまって顔をふせていた。

「あれ、結愛？ どうしたの？」

呼びかけると、結愛は小さく震えだし、それから「わああああ！」と泣きだした。

真由美は近所を気づかい「しーっ！」と言った。

しかし結愛は泣きやまなかった。それどころか、いっそう激しく泣いた。

「お母さんなんか！ お母さんなんか……！」

ふりしぼるような声で「お兄ちゃんばかり。」と言われて、真由美は気づく。私は今日、この子の話を一度でもちゃんと聞いたのか。

真由美は思わず結愛を抱きしめた。しばらく泣きじゃくっていた結愛が、やがてゆっくりと母親の背中に手を回したと同時に、翔太が顔を出し、「イチゴ、洗ったよ。」と言った。

朝比奈あすか 作家。東京都出身。著書に「人間タワー」「君たちは今が世界」などがある。

科学エッセー

本当は人間の脳も知っていること

稲垣栄洋

私たちの身の回りには、色とりどりの花が咲いています。

黄色い花があったり、紫色の花があったり、白い花があったりします。

それにしても、不思議です。

自然界は適者生存の世界です。

優れたものは生き残り、劣ったものは滅んでいくことが、自然界の厳しい法則です。それなのに、どうして、色とりどりの花があるのでしょうか。

自然界で生きる植物の花の色や形には意味があります。

もし、黄色い花が優れているとすれば、世界中の花は全て黄色に進化するはずですが。

しかし実際には、紫色の花もあれば、白い花も咲いています。

自然界には正解はありません。黄色い花が優れていることもあれば、他の色が優れていることもあります。もし、たった一つの正解があるとすれば、世界中の全ての花は同じ色と、同じ形に進化したことでしょう。

しかし実際には、さまざまな色の花があり、さまざまな形の花があります。

自然界には、さまざまな環境があります。場所が変われば正解が変わります。季節が変われば正解が変わります。自然界には、さまざまな居場所があり、さまざまな正解があります。自然界にある花々は、

どれもが正しくて、どれもが優れているのです。

全ての花には、それにふさわしい場所があります。そして、全ての花は、それぞれがふさわしい場所で美しく咲いているのです。

こうして、自然界にはさまざまな花が存在しています。

このように、いろいろな種類があることを「多様性」と言います。

そういえば、私たち人間にもいろいろな顔があったり、いろいろな性格があったりします。これも多様性です。

私たちは、多様性が大切であることを知っています。

ところが、問題があります。

じつは、私たち人間の脳は、多様性を理解することがあまり得意ではないのです。

自然界は多様で複雑です。自然界を理解することは、簡単ではありません。そこで、私たち人間の脳は、それをできるだけ単純に考えるように進化を遂げました。

そして、ばらばらでたくさんあるものをグループ分けしたり、順番をつけたりすることで、整理して理解しようとするしくみをもっています。そのため私たちの脳は、点数をつけたり、順番に並べたりして比べることが好きなのです。

それだけではありません。比べることが大好きな人間の脳は、ときには、優劣をつけてみたり、差別をしたりしてしまいます。多様な価値観が理解できなくて、戦争を起こしてしまったりすることさえあります。

それが私たちの脳なのです。

私たちの脳が理解できないほど、自然界は複雑で多様です。

自然界を見渡せば、本当にたくさん種類の花を見ることができます。

ただし、花の色は植物の種類によって決まっています。たとえば、タンポポの花は黄色ですし、スミレの花は紫色です。

タンポポが紫色になりたいと思っても、それはできません。スミレが黄色い花をうらやましく思っても、花の色は変わりません。

それぞれの花が、それぞれの居場所で、あるべき姿で咲いている。それが自然界です。

人間は、これらの花を改良して、新しい品種を作り出してきました。はたして人間たちは、どんな品種を作り出したでしょうか。

驚くべきことに、人間が作り出した園芸用の花は、自然界の花よりも、さらにさまざまな色があります。たとえば、パンジーはもともと自然界では紫色の花でしたが、品種改良をして、黄色やオレンジ色などさまざまな色を作り出されました。

また、バラも野生のものは白色のものが多いですが、品種改良が行われて、さまざまな色を作り出されています。

人間は、色とりどりの野生の花を改良して、さらにいろいろな色の花を作り出しました。

こうして花屋さんでは、自然の野山よりも、さらにさまざまな色の花が並んでいます。

本当は人間の脳も、「いろいろあるほうが美しい」ということを知っているのです。

みなさんはじめまして、声優の森川智之です。長年アニメやゲーム、外国映画の吹き替えなどの声優をしながら、声優養成所で声優になりたい人たちの育成もしています。名前は「ともゆき」ではなく「としゆき」と読みます。漢字の読み方って難しいですよね。養成所の講師として、生徒たちの名前を呼ぶときの私のなやみの種でもあります。私自身、子供のころから、「ともゆき」と呼ばれることのほうが多くて困っていました。まあ、それもふくめて自分の名前であり、人生のだと受け入れています。最近では、読み方を説明して楽しんで自分がいたりするので、よしとしましょうか。

さて、私が生業としてしている声優という職業は、自分の声で登場キャラクターや物語を表現する仕事です。みなさんが楽しんでいるアニメやゲーム、外国ドラマの吹き替えなどの声は、私たち声優が日々スタジオで録音したものです。いろいろな作品の中で、登場人物たちが話すせりふやナレーションを「声優」が担当している。そこまでは多くの人が想像できることかと思えます。では、もつとくわしく説明しましょう。

声優の仕事は、録音前に作品の台本をわたされます。まずは台本を黙読します。どんな物語なのか、作者はこの作品を通して読者に何を伝えたいのか、また物語の流れや自分が担当するキャラクターを十分理解します。そして準備が整ったら、マイクの前で声に出してせりふを発したり、朗読をしたりして録音します。台本は教科書、物語は教科書に掲載されている作品、録音監督は学校の先生、スタジオは教室、マイク前は自分の席と置きかえてみると、声優の仕事内容は国語の朗読の授業とそっくりじゃありませんか？ まさに学校での国語の授業が声優への第一歩であるといっても過言ではありません。

我々声優は、スタジオで国語の授業と同じ作業を日々行っています。プロの声優がしっかりとした読解力で作品を理解し、表現しているからこそ、アニメやゲームの作品はみなさんが楽しめるものになっているのです。ただ、いくら優秀な人でも、台本を初めて見て声に出して読み、正しく表現することは難しいことです。事前に作品を十分理解してから声に出すことが大切です。いきなり声に出して読むと読み間違えたり、表現が不安定になったりします。国語の朗読の授業も、同じように準備をしなければ、漢字を読み間違えたり、文章の意味を取り違えたりして、間違った表現になってしまいますよね。みなさん、そんな経験はありませんか？ 声優として同じことです。文章を声に出して表現するときには、リハーサル、予習がとても重要なのです。

そのうえで、自分の声で作品を表現することは、とても楽しいことです。作者の意図に沿わず勝手な解釈で表現することはできませんが、作品を十分理解したうえで、自分なりに工夫して朗読をすれば、あなただけのオリジナル表現の作品を楽しむことができ、聞く人をその世界に引きこむことができます。なんて魅力的なことでしょう。教科書の紙面上、タブレット上のただの文字の羅列が、あなたの声の表現によって立体的になり、作品をよりおもしろく魅力的にできるのです。

現在は、SNSなどが広まり、自分の声でコミュニケーションや表現をする機会が減っているように思います。声に出して自分の思いを伝えることが苦手な人も多くなっているのではないのでしょうか。ぜひ、国語の授業で声に出して相手に自分の思いを伝えることの大切さを感じてもらいたいです。そして、たくさんすばらしい文学作品や文章と出会い、声に出して読むことの楽しさを味わってもらいたいです。

学校あるある

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

伊藤ハムスター



理科室、こわい。



しやがくりょこう
修学旅行の夜、なかなかねむらない。

今好きな人
いる...

エーッ
教えて!!



友達のランドセルの色、うらやましくなる。

文化祭のポスターで本気出す生徒がいる。



本気を出してるなあ。



水泳の後の授業、ねむくなりがち。

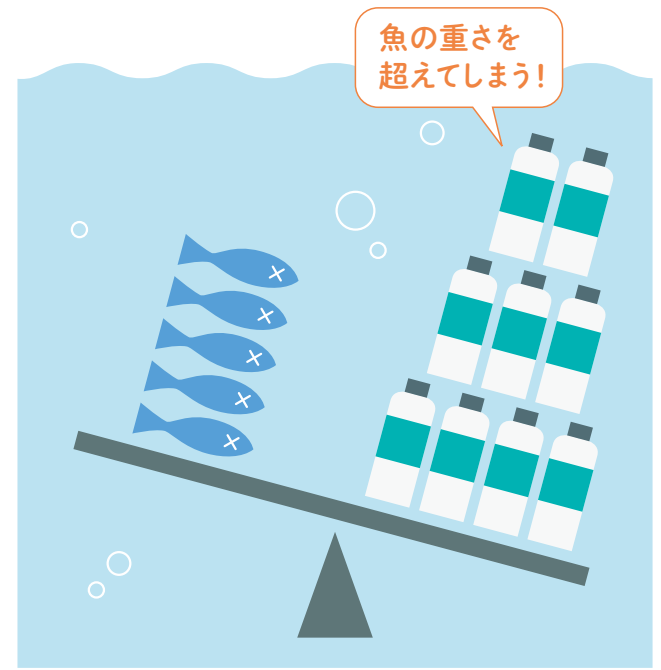
目で読むSDGs 図鑑

みんなが大人になるころ、海のプラスチックごみが、魚の量を超えるってほんと!?

世界中で「海洋プラスチックごみ」が問題になっています。現在、年間約800万トンのプラスチックごみが海に流れていて、やがて、海の魚の量を超えるともいわれています。もしかしたら、焼き魚やお刺身が食べられなくなってしまうかも……。どうすれば豊かな海を守るのでしょうか。本連載の環境問題を担当していただく、国立環境研究所の吉田綾先生に伺います。



いまの海
いま海には1億5000万トン以上のプラスチックごみがある。まだ魚のほうが多いけれど……。



予測される2050年の海
現在、年間約800万トンのプラスチックごみが海へ。このままだと、2050年にプラスチックごみが魚の量(重さ)を超えてしまう!

約40%がペットボトルでした。現在、日本では年間約220億本のペットボトルが出荷されています(ラブリ)。日本のペットボトルの回収率は非常に高く、9割を超えているのですが、そもそも消費されている絶対量がとても多いのです。

ペットボトルのごみを減らすことは、海洋プラスチックごみ問題解決への第一歩ともいえます。このころは、水筒に飲み物を入れて持ち歩く人も増えてきました。

「ペットボトル飲料を買わなければ、プラスチックごみは出ませんよね。たとえば、500mlの飲料を飲む場合、原料から製造、輸送、洗浄、廃棄、リサイクルまでの二酸化炭素排出量をくらべると、一般的な真空構造のステンレス製水筒は、12回ほ

ど使えば、ペットボトルを毎回使い捨てるよりも、二酸化炭素排出量が低くなり、環境にやさしいことがわかっていきます。(注2)

吉田先生は「まずは、自分たちが、プラスチックごみをどれくらい出しているかを調べて、できることを考えてみて」と話します。

外出先でペットボトル入りの飲料を買うかわりに、自宅で飲み物を用意して水筒で持参すれば、その分のプラスチックごみは減らせます。また、ペットボトル飲料を買って飲み終わった後は、確実にごみ箱などに捨てることも重要です。

他のプラスチックについても同様です。まずは、減らす。どうしても使う場合には、必要以上に使わないことを心がけると良いと思います。

プラスチックごみは、時間がたってもほとんど分解されません。海ガメがプラスチック製の捨てられた漁網にからまったり、鳥がエサと間違えてレジ袋を食べてしまったりするケースがあとを絶たないのです。さらに、プラスチックは、太陽

プラスチックごみは、時間がたってもほとんど分解されません。海ガメがプラスチック製の捨てられた漁網にからまったり、鳥がエサと間違えてレジ袋を食べてしまったりするケースがあとを絶たないのです。さらに、プラスチックは、太陽

「マイクログラスチックを、生物がからだに取りこんで、どのような影響があるかは、まだ十分に分かりません。ですが、マイクログラスチックには、体によくない化学物質がくっつきやすい性質があります。それらの化学物質が体内にたまることで、健康に悪影響をおよぼすことが心配されています。」

海洋プラスチックごみが増え続けてしまったら、いつか魚を食べられなくなるかもしれません。その日は少しずつ近づいているのです。

水筒(マイボトル)を使うと地球環境にいいって、ほんと?!

国内の海岸に漂着したプラスチックごみを調査したところ、全体の

私たちの食卓から焼き魚やお刺身が消える!?

ペットボトル、レジ袋、食品トレイ……、私たちの生活には、プラスチック製品があふれています。とても便利なプラスチックですが、回収されずに河川を通じて海に流れこんだ「海洋プラスチックごみ」が世界中で問題になっています。毎年海に流れ出ているプラスチックごみは、なんと約800万トン! イギリスのエン・マッカーサー財団が世界経済フォーラムと作成した調査書によると、「重要な行動

吉田先生、こうした魚を人間が食べても大丈夫なのでしょうか? 「マイクログラスチックを、生物がからだに取りこんで、どのような影響があるかは、まだ十分に分かりません。ですが、マイクログラスチックには、体によくない化学物質がくっつきやすい性質があります。それらの化学物質が体内にたまることで、健康に悪影響をおよぼすことが心配されています。」

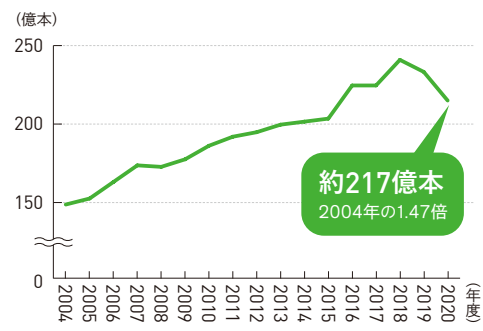
海洋プラスチックごみが増え続けてしまったら、いつか魚を食べられなくなるかもしれません。その日は少しずつ近づいているのです。

監修
国立研究開発法人
国立環境研究所
資源循環領域主任研究員



吉田綾先生
ごみ問題やリサイクルの現状を通して、持続可能なライフスタイルを研究している。書籍「これってホントにエコなの?」(東京書籍)の監訳も担当。

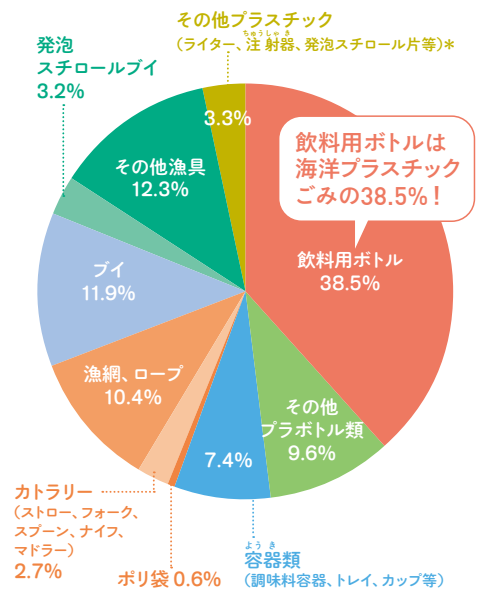
グラフ1 日本のペットボトル出荷本数



2020年度の出荷本数は約217億本で、2004年度の約148億本と比較すると1.47倍に増えた。PETボトルリサイクル推進協議会「PETボトルリサイクル 年次報告書」(2021年度版)をもとに作成。2020年度はコロナ禍の影響で減少。
<https://www.petbottle-rec.gr.jp/nenji/2021/p06.html>

グラフ2 海岸に漂着したプラスチックごみの種類別割合

平成28年度全国10地点(稚内、根室、函館、遊佐、串本、国東、対馬、五島、種子島、奄美)で漂着ごみのモニタリング調査が実施されました。各地点の海岸線50mの中に存在したごみの種類や量等を調査した結果です。*発泡スチロール片等、劣化して微小になったものは、個数を計測していません。



個数で見ると、飲料用ボトルがプラスチックごみ全体の38.5%を占めている。ほかには、漁具や海の道しるべになる「釣り」などが多く残っている。環境省「海洋ごみをめぐる最近の動向」をもとに作成。
<https://www.env.go.jp/content/900543475.pdf>

*注1: WORLD ECONOMIC FORUM「The New Plastics Economy: Rethinking the future of plastics」(新しいプラスチック経済~プラスチックの未来を再考する)より。
https://www3.weforum.org/docs/WEF_The_New_Plastics_Economy.pdf
*注2: 製品やサービスの原料調達から流通・消費・廃棄までにかかる環境負荷全体をデータで表す手法「ライフサイクルアセスメント」(LCA)によって算出。

夢は考古学者！

サッカーと鉱物が

大好きなイタリアっ子

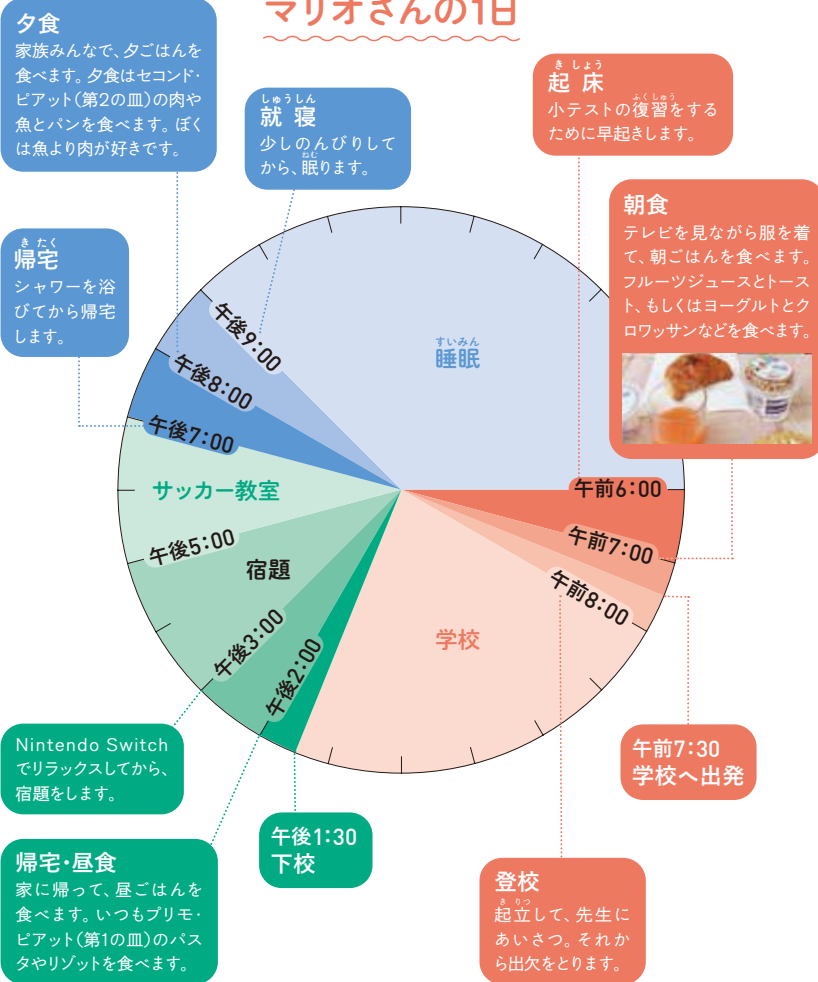


ポローニャにある「スタディオ・レナート・ダッラーラ」で、ポローニャFCとFCインテルナツィオナーレ・ミラノの試合を見ました。

世界の友だちは、いつたいどんな一日を過ごしているのだろう。日が暮れるまで外で遊んでいる？ それとも、放課後は塾で勉強しているのかな？ 今回はイタリア北部の街、ポローニャに住む12歳のマリオくんにお話を聞いてみました。

みんなは、「キャプテン翼」って読んだことあるかな？ 主人公の大空翼が大かつやくするサッカー漫画で、みんなのお父さんやお母さんが子どもの頃に大ヒットしたんだ。この「キャプテン翼」は海外でも人気で、とくにイタリアでは、アニメも放映されて、ファンが多い。イタリアの人たちは、日本のアニメとサッカーが大好きなんだ。イタリア北部の街・ポローニャに暮らすマリオさんも、サッカーに夢中。学校のある期間、週2〜3回はサッカー教室に通って2時間練習しているよ。すごい！ やつぱり、将来の夢はプロサッカー選手？ 「ぼくは考古学者になりたい！ だからいまは、地理や歴史、科学の勉強を一生けんめい頑張っています。鉱物も好きだから、いつかオーストラリアに行ってオパールを掘り起こしてみたいな。」 スポーツ万能で、スキーや水泳も好きだというマリオさんは、中学3年生になったばかり。イタリアでは、日本と違って、9月から新学期が始まるんだ。期末のお休みには、家族でサルデーニャ島に行ってきたそう。ほかにも、日本の学校とは異なる点がいくつかある。そのひとつは、在学期間。イタリアでは小学校で5年、中学校で3年、高校では5年間勉強するのが普通なんだ。そして、もうひとつ、イタリアでは小中学校から「留年」がある。成績が極端に悪かったり、出席日数が足りなかったりすると、進級できずに同じ学年をもう一年やることに……。さらに中学校の卒業前には、国が行う卒業試験が待ちかまえている。科目はイタリア語や数学などの筆記と口頭試験、小論文もある。なかなかの難関……。だけど、ガッツのあるマリオさんなら、きっとクリアできるさ！

マリオさんの1日



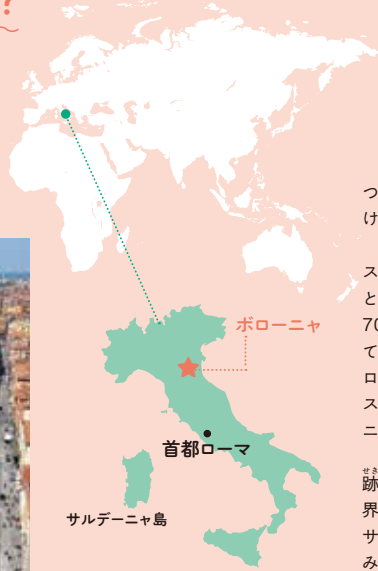
名前 Mario(中学3年・13歳)
好きなこと サッカーが好きで、サッカー教室に通っています。水泳、スキーも好き。鉱物も好きです。
好きな教科 歴史、地理、テクノロジー(技術)
好きな食べ物 グリルで焼いた肉
行ってみたい国 オーストラリア。オパールを見つけたい。
どんな人になりたい? 考古学者
地球のためにふだんやっていること ゴミの分別/電気をまめに消す/歯みがきをするとき、水を出しっぱなしにしない
勉強している科目は? イタリア語(国語)、算数、科学、歴史、地理、テクノロジー、英語、スペイン語、美術、音楽、体育、宗教、公民
学校の休み時間にはなにをしている? 2回休憩時間があって、おやつを食べたり、遊んだりしています。ぼくはだいたい友だちとサッカーをします。
リラックスタイムはなにをしている? 夕食の後は、妹とゲームの「FIFA」や「フォートナイト」で遊んだり、家族で音楽番組「Xファクター」や料理番組「マスターシェフ」を見たりします。ベッドで、たまに読書をしします。いまは、『Piccoli Brividi』という本を読んでいます。

イタリアって、どんな国?

面積 約30万km²
人口 約6000万人(2021年国連推計値)
首都 ローマ
宗教 キリスト教(カトリック)が約80%
主要産業 製造業(機械、繊維、自動車、鉄鋼など)



ポローニャの街並み



イタリア語の「こんにちは」 Ciao(チャオ!)
イタリア語の「ありがとう」 Grazie(グラッツィエ!)

世界地図で、地中海にグイッと突き出た「長ぐつ形」の半島を見つけてみよう。これがイタリアです。イタリアの国民食といえば、「パスタ」。小麦などで作るめん類のことで、長いものから短いものまで、700種類近くのパスタがあるとされています。日本でもおなじみの「ポロネーゼ・パスタ(ミートソースのパスタ)」は、マリオさんが住むポローニャで生まれました。イタリアには、歴史的な建物や遺跡も多く、世界遺産の数は58個で世界一(2022年現在)。有名な「ピサの斜塔」や「コロッセオ」だけでなく、みんなはほかにいくつ知っている?

参考 ● 外務省「イタリア基礎データ」

先生がたへ

読むことを通して、さまざまなものの見方、考え方に触れてほしい。
思考を深めたり、想像を膨らませたりしながら、自分の考えや世界を広げてほしい。
そんな思いから、東京書籍では、小中学生のための新しい読み物機関誌を創刊します。

(年2回発行予定)

児童、生徒の皆さんにご紹介いただき、
学校図書館で、教室で、広くご活用いただけますと幸いです。

「青いスピン」3つの楽しみ方

1

お気に入りを見つけよう

毎号、物語やエッセー、科学読み物など、さまざまなジャンルの作品をけいさいします。短い文章が多いので、気軽に楽しんで読めるはず。いろいろな作品の中から、あなたのお気に入りを見つけてください。

2

ウェブで読もう

「青いスピン」にはウェブページがございます。インターネットになげれば、いつでもどこでも読むことができます。

※インターネットの通信費がかかります。
※現在、ウェブページは準備中です。

3

いっしょに作ろう

年に一度、「青いスピン」にのせる新しい物語を募集します。あなたも作品を書いて、「青いスピン」をいっしょに作ってみませんか。

今号の「青いスピン」に関して、ご意見・ご感想をお聞かせください。



青いスピン 創刊号
(2022年 秋)
2022年9月1日発行

発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リールテック

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>
東書WEBショップ <https://shop.tokyo-shoseki.co.jp>

本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445(営業総轄本部) Fax:03-5390-6012
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
名古屋 052-939-2722 大阪 06-6397-1350
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

表紙絵 しらこ
アートディレクション 山田和寛(nipponia)
表紙・本文デザイン 山田和寛+佐々木英子(nipponia)

 東京書籍